

[エッセイ] 私たちのドイツ体験

その他のタイトル	[Essais] Erlebnis in Deutschland
著者	細里 さや香, 上村 真耶, 笹鹿 智史, 前田 晃男, 森 かおり, 藤川 穰輔
雑誌名	独逸文学
巻	47
ページ	445-460
発行年	2003-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10112/00018115

[エッセイ]

私たちのドイツ体験

1. 細里さや香：ドイツ体験記

2001年春、私は関西大学のドイツ語ドイツ文学科生となりました。そしてその年の夏、つまりドイツ語を勉強し始めて約三ヵ月後に、私はゲッティンゲン大学のサマーコースに参加することになったのです。今から思えば、まだ文法さえ一通りも学んでいなかったその程度の知識でよく行こうと決心したものだ、自分でも感心しています。しかしその時の私は、どうしてもドイツへ行きたくて仕方がありませんでした。新しく始まった大学生活で何かに挑戦してみたかったという想いもあったし、これから少なくとも四年の間、自分が学んでいくドイツはいったいどんな所なのかとも興味もあり、確かめてみたかったからです。そして、その時の決断は正しかったと、今改めて感じています。ドイツでのあの一ヶ月間、私はとても素晴らしい貴重な体験をしてきました。おそらく、一年後であればこのような思い出はなかったと思います。中でもこのサマーコースで特に私の心に残った事と言えば、やはりドイツの人々の優しさではないかと思います。私は、その多くの人の優しさに恵まれ、そしてそれに支えられました。いくら感謝してもしきれないくらいに…。

出来ることならば、私がドイツで出会った人たちとの思い出全てを書きたいのですが、それではあまりにも長くなってしまいますので、今はその一部を思い出してみようと思います。

まずは私の隣部屋に住んでいたドイツ人の学生。彼は、彼のガールフレンドと一緒に、まだ寮生活になれない私に真っ先に声をかけてくれた大切な友人です。二人の存在は私にとって安心のできる、とても大きなものでした。彼らがいなかったら私の寮生活は全く違ったものになっていたと思います。夕食をみんなで食べようと誘ってくれたり、授業の宿題をチェックしてくれたり、ピアノが好きな私の為にわざわざピアノの部屋を借りてくれ、そして知らない町へも連れて行ってくれました。私は彼らからたくさんのお話を教わりました。寮の中でのルール、日常生

活の常識…。二人には本当に感謝しています。

次は、寮のすぐ近くにあったレストランのオーナーさん。初めは怖そうに見えた彼ですが、実はとても優しいおじさんでした。ドイツに着いてバスに乗り、私たちがゲッティンゲンに到着したのはもう真夜中。そこで慌てて入ったレストランのオーナーが彼でした。閉店の準備をしていたのに快く私たちにテーブルを用意してくれました。料理もとても美味しかったので何度か通っているうち、いつの間にか仲良くなっていました。ドイツ最後の日も友達とそこで食事をし、彼にもお世話になったお礼を言いました。お別れするのは寂しかったのですが、写真を撮って握手をして、料理もご馳走になりました。ここでは心温まるもてなしというものを身をもって経験しました。今度ゲッティンゲンへ行った時には是非また行きたいお店です。

三人目は私が参加したクラスを担当してくださった先生。明るくとても素敵な女性で、まだドイツ語を始めたばかりの私たちに本当に丁寧に分かりやすく教えてくださいました。クラスの間みんなユニークな人たちばかりで、韓国人やスペイン人、イタリア人、ポーランド人、アフリカ人、日本人と国籍はばらばらでしたが、ここで話す言語はドイツ語、と一つだけ。他の国の人達の間で感じる感覚や発言力に直に触れることができたので、とても新鮮で楽しい時間を過ごせました。

そして四人目はゲッティンゲン大学で日本語を勉強しているドイツ人の学生。彼女と知り合ったのは8月の中頃だったのですが、短い間にいろいろな所へ連れて行ってもらったり、お勧めのお店を教えてくださいました。私にとってとても活動的な思い出を作ることが出来ました。その一つに、彼女のお母さん直伝レシピのケーキと一緒に作ったことがあります。日曜日の朝、友達といつもより早めに起きて彼女と待ち合わせ、ケーキ材料のフルーツを買いに朝市へと行きました。目の前は絵や写真で見るとような光景で、思わず声を上げ感動したのを覚えています。そして私たちが作ったケーキは全部で三種類。ツヴィッシェンクーヘンとパウンドケーキ、それにシュトレン。三人で日本語とドイツ語を互いに教わりながら楽しく料理開始。一緒に作っていて分かったのですが、彼女は非常に自分の家庭の味を大切に、そして誇りに思っているのだと感じました。ドイツではどの家庭でもそうなのでしょうか？私は、そんな

私たちのドイツ体験

彼女を尊敬しました。焼き上げている間、お昼ご飯にしようということで彼女はちらし寿司を作ってくれました。もちろんレトルトでしたが、8月も残り約一週間になって久しぶりにご飯を食べました。彼女の心遣いに感謝です。焼きあがったケーキたちはもちろん最高で、早速レシピを教えてもらいました。この日はドイツの家庭をちょっとだけのぞくことが出来た、温かい一日でした。

私にとって初めての海外体験でもあったこのサマーコースは、これらのすばらしい人たちがいたからこそ成り立ったものだと今改めて思います。偶然に会うことのできたこの多くの人たち、ここでは紹介することが出来ませんでした。本当に色々な人によって私は支えられてきました。もちろん彼らだけでなく、この思い出には私を陰で支えてくれた家族や友達、先生たちの協力もありました。一人一人が、ドイツを私にとってより一層魅力ある特別な存在にしてくれました。本当に感謝しています。この夏の体験は、私にとって忘れられないすばらしい宝物になりました。

(2001年度 本学ドイツ語ドイツ文学科入学)

2. 上村真耶：石畳とアスファルト

2001年夏、初めて私は石畳が憎いと思った。

石畳といったらそれまでのイメージでは、美しい街並みを形成する一要素であって、まさか憎むことになるなどとは夢にも思わなかった。だが、一月分以上の荷物を詰め込んだスーツケースを引きずる身には、ただ行く手を阻むものでしかなかった。持ち上げた方がましかと考えても、スーツケースというのは元来転がすものなので、それにも限度がある。きつい日差しの中で、汗だくになりながら、初めて来る街で、荷物を引きずり石畳の隙間にコマを取られて思うように進まないしていると、そりゃあ憎みたくもなる。

といったことをいらいだらだら考えながら、段差を越えようとガタガタやっている時、後ろからやってきたドイツ人の兄さんがひょいと荷物を持ち上げてくれて、そのまま何も言わずに去っていくということがあった。そのときに思ったのは、「特別なことじゃないんだな」だった。

電車の乗り降りで鉄道関係者でもない人がさっと助けてくれたり、地

図を広げて道を確認しようとしただけで声を掛けてくれたり、“May I help you?”しか英語で言えないのに話し掛けてくれたり、ホームでポーっとしてたら「電車が来たよ」と肩を叩いてくれたり、切符の買い方を教えてくれたり。日本における「外国の人」の扱いとは全然違って、特別な存在じゃないんだな、と思った（「外国の人」だから特に親切なのかもしれないけれど）。私は日本での「外国の人」の扱いに慣れ切っていて、ドイツでは変に自分が異人であるということを意識してしまっていたから、その発見はとても新鮮だった。日本では、日本人同士でも、困ってそうだからといって声を掛けることは少ない気がする（ドイツ人同士でも、ドイツ人が私にしてくれたような接し方をするかはわからないが）。それにはそれぞれのバックグラウンドの違いがあつてのことなんだろう。だが、そういうところで日本人らしくなくても良く、他の良いところは吸収すべきだと私は思い、友人と „Kann ich Ihnen helfen?“ 使って使おうぜ、と燃えたりした。

自意識過剰と言われればそれまでだが、奇異の目で見られることももちろんあった。そんなドイツ人がいるのも当然だと思う。全員が全員同じように親切であるというような幻想は持たないし、好奇心を持つという行為は当たり前なことだと考えるからだ。幸運にも私は、好奇の目に晒されるよりも前に好意に触れていたのも、卑屈になることもなく平然としていられた。だが、「ドイツ人は私たちを差別するから嫌い」だと言う黒人の女の子も確かにいた。

ドイツの、ドイツ人のすべてが良いとは言わないし、そんなことはありえない。だが、他を知ることで自分を知れるし、それぞれのどこが良くてどこが悪いのかを見ることができると思う。日本のアスファルトは見目は悪いがスーツケースを転がすには楽だし、ドイツの石畳は素敵だけれどスーツケースの敵だ。「外国の人」を変に特別扱いしないのはいいことだけど、奇異の目で見られることもある。別にどちらかが絶対的に良い訳ではない。それらの良いところだけつまみ食いすることが出来るのが複数の文化を知ることの利点のひとつだ、と私は考えている。

(2000年度 本学ドイツ語ドイツ文学科入学)

3. 笹鹿智史：疾風怒濤の10 Tage

本場の生のドイツ語に触れたい、そう思ったきっかけは、やはりドイツ語ドイツ文学科に入学したからだろう。それまで海外に出た経験はなく、どこか他の国に行きたいという思いは漠然とあったものの、そこまでドイツを知りたいという気持ちはなかった。しかし、第一外国語としてドイツ語を学んでいくうちに、ドイツの風土や文化を直に感じたいと思うようになっていった。そして、ついにその思いが実行されることとなった。コミュニケーションクラスのThomas Spindler先生主催のドイツ語体験ツアーが行われると聞いたとき、絶好の機会と、参加を決意した。

8月も終わりにさしかかり、世間は夏休みも終わるといふ頃、ぼくたちは日本を発つことになった。といっても、直接ドイツに向かうわけではなく、一度シンガポールで1泊してからという形なので、その際に休憩できるという点ではうれしいものだったが、ドイツに早く行きたいという気持ちは大きくなるばかりだった。

しかし、飛行機での長旅も終わり、ドイツに着いた時は憔悴しきっていた。機内では気分が高揚したせいで、あまり睡眠をとれなかったからだ。しかし、この日はバスでホテルに移動するだけだったので、それほど問題ではなかったが、なによりも飛行機を降りて、まず空の明るさに驚いた。もう午後9時になろうというのに夕方のような薄暗さだったからだ。よく考えてみると、サマータイム制を導入しているので、日本式に直すとまだ8時前ぐらいだったのだが、そのことを思い出すことで、ここはドイツだということあらためて実感させられた。

ドイツに着いて初めてドイツ語で話したのは、ホテルについてすぐのことだった。食事のメニューは決まっているけれど、ドリンクだけは別料金で、それだけは自分で頼むことになっていたからだ。そこでも日本とは違うシステムに驚きながらも、ついにドイツ語を使う機会がきたのだ。といっても、ただメニューに「bitte」を付けるだけの簡単なものではあるが、本場ではじめて使うドイツ語だけあって、やや緊張しながらも注文した。やはりビールの本場なのでビールを頼もうと思ったが、メニューのビール欄になにか、かわったものがある。「ラードラー Radler

(Bier mit Limonade)」という飲み物が目に付き、注文してみることにした。陳腐な発音ではあったが、なんとか通じたらしく、いよいよそれがテーブルに置かれた。味は飲みやすいものの、本当にただビールとレモネードをまぜただけか、と思うようななにか物足りなさが残ったものだったが、ドイツ語ではじめて注文し、またドイツではじめて飲んだビールとしては印象深いものとなった。

到着した当日はもう遅かったので、翌日から観光することになった。2日間にわたってロマンチック街道と呼ばれる、ドイツ特有の情緒あふれる街を回ったのだが、特に心に残ったのはローテンブルク Rothenburg とノイシュヴァインシュタイン Neuschwanstein 城だ。ローテンブルクの方は自由時間も長かったし、ドイツの街並みというものをよく体験できたと思う。この街は田舎のほうに位置し、戦火をまぬがれたということも要因の1つであると思うのだが、日本の街とちがう大きな特徴はまるで町全体がテーマパークであるかのようなたたずまいだったことだ。まず、普通の住居もなにか中世の雰囲気のみちており、それらの隣に城壁があり、道も石畳が敷きつめてあった。おそらくレプリカではあろうと思われるものの、中世の武器や防具を売っている店があるなど、まさに中世が舞台のゲーム世界に入ったような気分だった。日本でこのような中世の雰囲気が残っているような街をあえて挙げるとすれば、京都の祇園などがそれにあたるだろうか。ノイシュヴァインシュタイン城のほうは、本当に観光地といったところで、日本人観光客も非常に多く、ここが東京ディズニーランドのモデルということもふまえると、いま自分がドイツに来ているのか、あるいは東京に来ているのか分からないという気持ちになったことには、少々風情のなさを感じてしまった。しかし、城そのものは大変荘厳で、建設当時は国家財政を圧迫したという話が有名だけれども、現在は、観光業でドイツに大きな収入をもたらしていることが一種の皮肉として頷けた。実際にドイツに滞在したのは、この2日間だけでこの城を離れたあとはすぐにオーストリアに向かった。

オーストリアで過ごした日々は、バカンスのようなものだった。有名な場所を観光するのも、それはそれで楽しいことなのだが、こういう楽しみ方は心も体も落ちつくし、その土地の人にも直接に触れ合うことのできる良い機会だと思う。ホテルの近くにあるヴァイセンゼー

Weisenseeという湖には、そのホテルのオーナーさんのプライベートエリアがあって、そこでボートに乗ったり、軽く泳いだりもした。これまで真水で泳いだことはなく、気温も低かったこともあって、それほど泳げなかったけれど、これは新鮮な体験だったと思う。川での急流下りもまたはじめての体験だ。途中で友達が川に転落するというハプニングがあったが、それも今では楽しい思い出として心に残っている。ある日、宿泊中のホテルがある町の隣町へ出るために電車に乗ったのだが、行きに乗った普通電車が、コンパートメントという、座席が4人一組の個室のようになっている構造だったことも、はじめての体験だったので印象深い。またホテル滞在中の夜も退屈せずに楽しめた。「ケーゲルKegel」というボーリングのようなスポーツをしたり、夜更けまで友だちと飲んだり。ときには現地の同い年くらいの従業員の人もくわわたりして、わずかながらも現地の若者たちと交流できたことは、とても嬉しかったものである。

このように、今回のドイツ旅行は毎日、朝から晩までかなり密度の濃い体験ができたと思う。しかし、こんなに短い期間、しかもシンガポール経由ということもあって、10日間の旅行の中で現地にいたのは全行程のわずかが半分くらいしかなかったということは、やはり物足りなさが残る。また、場所を移動する際の時間が長いことも、この短い旅程の中ではかなり気になるものだった。というのもやはり、これだけの日程では、あまりドイツそのものを堪能することは困難だからだ。けれども、もっとドイツ語を上達させて、なるべく英語やジェスチャーなしで現地の人と会話をしたいと思ったのも事実である。いずれにしてもこの旅行のおかげで、今後も機会があれば、もっとドイツという国を身をもって体験してみたいと思うようになった。それどころかできれば1、2年後にはがんばってドイツに1年ほど留学してみたいとも考えている。

(2002年度 本学ドイツ語ドイツ文学科入学)

4. 前田晃男：私のドイツ留学

ドイツ留学は、関大に入学したときからの目標であった。そもそも「ドイツ」に興味を持ったきっかけは些細なことである。簡単

に言えばドイツがサッカー大国で、サッカーに明け暮れていた私の少年時代にちょうどドイツ代表がワールドカップで大活躍したからである。その代表選手たちへの憧れから、ドイツは私にとって特別な国になったのだが、大学でドイツ語を学び始めてからはドイツへの関心はさまざまな分野において高まり、実際にドイツで勉強したいと思うまでになったのである。

昨年、私はそのドイツ留学を実現させた。今振り返ってみれば、1年間という限られた期間でさまざまなことに挑戦した。大学のゼミに出たのはもちろん、シュタイナー学校で授業参観をしたり、Deutsches Theaterでちょっとした劇を演じたりと、それぞれ貴重な体験であった。

しかし最も思い出に残っているのは、やはりサッカーチームに入ってサッカーをしたことである。サッカー仲間との交流こそが私の留學生活においては重要であったといえる。これから、私がサッカーチームで経験したことを紹介する。

サッカーがきっかけでドイツに興味を持ったとはいえ、私は当初からチームに入ってサッカーをするつもりではなかった。留學の目的はあくまでも大学で勉強することだったので、サッカーをする時間も余裕もないだろうと思っていた。案の定、4月に学期が始まると私は授業以外の時間を自習にあて、次第に自宅や図書館にこもりがちになった。

しかし、そのように一人で勉強するのは、日本にいるときと状況が変わらないことに気づいた。私はむしろ留學中にしかできないことをしようと考え直した。そして、サッカーの本場ドイツでサッカーをし、地元の人たちと交流しようと決心したのである。

私は5月からSC Weendeというクラブに入部し、7月からはRW Harsteというクラブでプレーした。この間の移籍の話は省くが、いずれにしる週3回の練習と週末の試合は私の生活における中心になったのである。

日本人である私がチームに加入したことは、選手にとっても興味津々であった。私は彼らから日本事情について聞かれ、私の発言や行動はいわば日本人の典型とみなされた。例えば私が試合中に感情を表に出さず、いつも「礼儀正しく」している姿を見て、彼らはそれを「日本人気質」だと称した。また、私が自分の練習着をたたむのを見たときも同様であ

った。日本人の特性か個人的な性格かの区別はともかく、チームメイトにとっては私の姿が「日本人の姿」になるのである。

しかし一方で、私もまたチームメイトの姿に「典型的ドイツ人像」を見出そうとしていたように思う。例えば、練習後は皆でビールを飲んで団欒するのだが、それがいかにもドイツ人らしかったし、ドイツ人と一緒にプレーをして、ドイツサッカーの「無骨さ」を実感した（ただしサッカーに関しては、選手が年齢を問わず恵まれた身体を生かして必死にプレーするところがドイツの強さだと分かったことも大きな発見であった）。つまり、私は無意識のうちに自分のドイツ人に対する先入観を枠組みとして、「ドイツ人」という全体像を捉え直そうとしていたのである。

ところで、私にとってはチームとの関わりがドイツ語上達の近道になったと言える。当然のことながら車での移動中、練習中、試合中、クラブハウスでの団欒など、あらゆる状況においてドイツ語を使わざるを得ないのだが、だからこそ「生」のドイツ語を学ぶことができた。特に、練習後のひとときはドイツ語の練習に最適であった。私はメモとペンを用意し、ビールを飲んで忘れてもいいように何でも新しく覚えた単語や表現をすべて書き取るようにした。私のメモはいわゆる蔑語や辞書にならないような表現、専門用語であふれたが、こうしてビールを飲みながらドイツ語を学ぶのが私のスタイルになったのである。最初は言いたいことがうまく伝えられなかった私は、いつしか自分がドイツ語を話していることさえ意識しなくなるほど話せるようになった。試合中に指示を出す時、とっさにドイツ語が口をついて出るのはその「証」だろう。

ドイツでサッカーができたことはこの上ない幸せであった。この国のサッカー熱には圧倒されるばかりである。私は自分のチームの試合に「サポーター」が集まるとは考えてもみなかった。サポーターと言っても選手の家族や友人、近所の老夫婦たちのことであるが、ホームゲームには必ず50人ぐらいの観客が集まった。彼らは決まってビールとソーセージを手に観戦し、試合後は両チームの選手も入り乱れてまたビールを飲みながらサッカー談義に花を咲かせるのである。私がハットトリックを達成したときは、試合後にたくさんの人が声をかけてくれた。

そんな観客と私の間には一つの約束事ができた。それは私が試合でゴールを決めると、パフォーマンスとして彼らに向かって「お辞儀」をす

ることであった。すると彼らもお辞儀を返すのである（中にはなぜか手を合わせる人もいたが）。この一種の掛合いがどのようにして始まったのか、その由来は定かでないが、私がゴールした時の慣例になったのである。

残念ながら私はシーズンの途中でチームを去ることになったが、通算で8ゴールを挙げた。その記録は地元紙Göttinger Tageblattに載っている。初ゴールのときは私の名前が'Maedakio'と誤って表記されたが、その後は間違えられることもなかった。試合でゴールを挙げた翌日に新聞を購入し、スポーツ記事で自分の名前を探すのは私の楽しみであった。

サッカーチームの存在は結果的に日常生活にも影響を与え、私は充実した日々を送ることができた。午前中に授業、昼間は遊んで夕方にサッカーをするといった生活のリズムができてだけでなく、大学の授業においても気持ちに余裕が生まれ、内容を理解するのは依然として難しかったが、発言したりグループ活動に参加したりするのを恐れなくなった。このように、私はサッカー仲間との「出会い」が1年間の留学において最大の収穫になったのである。

昨年の9月、私は大阪・ハンブルク友好都市協会と大阪市姉妹都市交流協議会が主催するドイツ語スピーチコンテストに参加して、大阪市長賞を受賞した。次の目標はサッカーワールドカップのドイツ大会である。もちろん選手としては無理だが、通訳などの仕事で私の留学経験を生かしたい。

(1998年度 本学ドイツ語ドイツ文学科入学)

5. 森かおり：Göttingen から見たドイツ

私が現在留学しているGöttingenという町は、人口が約13万人、その内学生が約2万4千人という小さな大学都市です。小さな町といってもその歴史は古く、時代をさかのぼって954年、オットー1世の時代に「Gutingi」として歴史にその名が登場しました。中世期にはハンザ同盟の一員として、また商業都市として全盛期を迎えたようです。1734年にはハノーバー選帝侯Georg AugustによってGeorg-August-Universität（通称Göttinger Universität）が設立され、それ以後200年以上の歴史を

持つこのゲッティンゲン大学は今までに40人以上のノーベル賞受賞者を出し、現在のドイツ首相であるシュレーダーもこの大学で勉強したことで有名です。(シュレーダーという名前の居酒屋もあるくらいです。)現在のゲッティンゲン大学は全部で14の学部を持ち、図書館もドイツで5本の指に入るもので、メンザの食事もまだまだおいしいほうだという噂の、大規模なものになっています。

さて、この小さな大学町に私がやってきたのは今から約2年前、2001年の2月でした。初めてゲッティンゲンに足を踏み入れたときは雪は降っているし、どんよりと空は曇っているし、寒いし、自分の部屋があくまでのユースホステル暮らしで気分はなかなか晴れませんでした。それでも大学の入学手続きや市役所での用事などでドイツ人と接触する機会はたくさんありましたからドイツ語のほうもそのうち慣れるんだろうとっていたんですが、いざドイツ人と話してみると自分のドイツ語は通じないし、相手もなかなか聞いてくれないし、さらに悪いことには相手に丸め込まれて、一言「O.K.? Dann Wiedersehen!」で部屋を追い出されることもしばしばありました。最近ドイツ人の友達から聞いて知ったことですが、役所のドイツ人はドイツ人に対しても同じように不親切なそうです。しかし、そのことから私は今でも市役所恐怖症です。ところがこのドイツ人の「不親切さ(?)」はどうやら市役所内だけではないようです。例えば、閉店時間を1分違わず店を閉めるドイツ人、これは閉店時間を早めることはありますが、遅らせるところを見たことがありません、そしてこの一言、「Feierabend!」(ニコリともせず)。お客様は神様じゃないんですね。また、スーパーに並ぶ腐りきった野菜や果物たち、スーパーによっては新鮮なものがないところもあります。さらに、ぶつかってきて「ごめんなさい」を言わずに、「気がつかなかったから」と屁理屈を並べるドイツ人。今になってこそそんなことには慣れましたが、2年前は全部が全部ショッキングなことでした。

反対に気に入っているところもたくさんあります。まず、どこにおいても「Hallo」から始まって「Tschüss」で終わるところや、どんな小さな町にも映画館やTheaterがあるところ、晴れた日のオープンカフェ(少しでも晴れると、どこからともなく人がやって来て小さな町がすぐにいっぱいになります。)、夏の暑い日にみんなで芝生の上で日光浴やパー

ベキュー、そして近くの湖に泳ぎに行くこと、町全体がライトアップされみんなでグリューワインを飲む冬のクリスマス市（今年はどうやら市がいつもより早く始まったらしく教会がものすごく怒ったらしいですよ。みんな待ちきれなかったんでしょうね。）。特に素敵だなと思うことは、年齢は関係なく学生同士はお互いに「Du」を使って呼び合うことです。日本では大学でもまだまだ年上、年下という概念が付きまといてお互いに距離を置くことも時々ありますが、ドイツではそんなことはありません。初対面から「Du」を使って呼び合い誰もお互いの年齢を気にしあうことはありません。ですから、初対面で年上だからといって気後れすることもありません。

さらに、私がゲッティンゲンに来て驚いたことを少し書いてみようと思います。なんといっても外国人の多さです。日本の大学にいてキャンパス内で留学生を見ることはありますが、さすがにドイツの大学に来てこんなに大勢の外人（ドイツ人でない）を見ることになるのは想像も付きませんでした。町を歩いていてもドイツ語以外の外国語が耳に飛び込んでくることはよくあることです。町にあるレストランもトルコ料理をはじめインド料理やイタリア料理など世界各国の料理を楽しむことができます、また日本食をはじめアジアやアラブ、アフリカの食材もこんな小さな町で手に入れることができます。私もここに来てたくさんの友達ができました、アラブ人や東欧人、南米から来た友達もいればアフリカから来た人もいます。さまざまな国の文化や宗教観、伝統などはいつも私に新しい知識や驚きをもたらしてくれ、そして国境を越えた絆はこの上ない喜びを常に感じさせてくれます。ただ、困ったことといえば、いつもみんなでご飯を作るときメニューを決めるのが大変だということです。宗教上の関係から豚肉が食べれない人、牛肉が食べれない人、もっと大変なのはベジタリアンの人。いかに鶏肉で毎回違ったメニューを作るかでみんな頭を悩ましています。面白いのはいつもお酒を飲んでいるムスリムの友達がラマダンだからといってぱったりとお酒を飲むのをやめ、ジンジャーエールを飲んでいる姿（タバコを吸いながら）。同じ宗教の人でも人によって解釈が違い、これをしてはあれはやらない人や、これもあれもやらない人もいます。そのようなことを身近でみると自然に興味をわいてきて今度、コーランでも借りて読んでみようかとも思

っています。

また、ドイツ全体において驚いたことは、釣りをするにも潮干狩りをするにも免許がいるということです。免許といってもそんなたいそうなものではないようですが、指定の場所に申請してお金を払わなければいけないようです。日本の感覚でちょっと川釣りにでも行こうもんなら警察に捕まって罰金を払わされるそうです。この前、あまりにもゲッティンゲンで新鮮な魚が手に入らないので友達と一緒に釣りに行こうと計画していたらドイツ人の友達に止められました、警察に見つかる前で本当によかったです。ドイツの道路を走っていて目に付くキャンプ場も私が驚いたものの一つです。Urlaubにうるさいドイツですが、キャンプ場での生活はどう見ても心休まるUrlaubとは思えません。所狭しと並んだキャンプカーやテント、そのお隣さんとの距離は数メートル。初めてドイツでキャンプ場を見たとき、信じられずに思わず「ここは何をすることなの？」と友達に聞いてしまいました。そこにはRuhezeitという時間があって、この間には誰も何もやっていけないそうです。音楽を聴いてもいけない、バーベキューをしてもいけない、など。たとえ車の中にシャワーやキッチン、トイレなどがあるろうともこんなたくさんの人が一つの場所に静かさを求めて（かどうかは分かりませんが）やってくるのはどうもおかしいと思います。外から見たらそこは真四角な倉庫が並んだ作業場みたいなものです。また、キャンプ場によっては本当に何もないところもあります、海もない、川もない、湖もない、山もない、ただキャンプ場が続く道があるだけ。そこで人々はUrlaubの間ずっと過ごすのだそうです。これもドイツ人の友達に言わせると一つの伝統なのだそうです。家族と一緒に家から離れてなおかつお金の掛からないところで過ごす、私には未だによく理解できませんがそれでも満員のキャンプ場を見ているとこの伝統はまだまだドイツで生きているんだなあと感じられずにはいられません。

ところで、先の9月に首相続投が決まったシュレーダー政権の下でドイツは未だに景気低迷による財政難に苦しみ、首相も選挙後に増税案を打ち出すなど苦勞しているようですが、この増税案のおかげで首相人気も急降下中です。最近シュレーダーの声そっくりさんが歌った首相を皮肉った「税金の歌 (Der Steuersong)」が大人気でいたるところで流れ

ています。「選挙で選ばれたのは俺、これこそ民主主義の醍醐味」や「息を吸うたびに払う呼吸税」など皮肉たっぷりのパロディーソングが町中流れています。さらに増税とともに問題となっているのは「失業率」。最近読んだ新聞によると、ベルリンの労働局では増え続ける失業率対策に積極的に海外での仕事が紹介されているようです。マヨルカやカナリア諸島での観光ガイド、スカンジナビア諸国での塗装業、オーストリアのホテルで接客業、アイスランドの農場で肉体労働、さらに医者、看護婦、ヘルパーなどの海外労働など、ドイツも失業率に頭を悩ませているようですが、このまま行くと「南の国でドイツ語留学」なんて言う宣伝を見ることも日常茶飯事になってきそうですね。

最後に、来年の3月で私の留学生活も終わってしまいますが、やっぱりドイツに来てよかったとしみじみ思うことは、自分のドイツ語能力の上達もありますが、なんととっても国際色豊かな友人をもてるということです。ドイツはヨーロッパの中心にあるということや、移民受入数第3の国ということもあり、世界中から働くにしろ、勉強するにしろ、いろんな人がドイツに来ています。これから留学する予定の人はドイツに来たからドイツ人、と決め付けずにとりあえずいろんな人と接触し、自分の未知の世界を体験することを勧めたいです。

(1998年度 本学ドイツ語ドイツ文学科入学)

6. 藤川穰輔：ドイツでの学生生活

2001年の春に関西大学ドイツ語ドイツ文学科を卒業した後、6月の末にテュービンゲンへ引っ越してきました。テュービンゲンはバーデン・ヴュルテンベルク州の州都シュトゥットガルトから少し南へ下った位置にある、ネッカー川沿いの小さな田舎町です。ヘッセやヘルダーリンとも縁のある、古くからの大学町です。

学期が始まる3ヶ月以上も前にやってきた理由の一つに、「外国人のための入学試験 (DSH)」に備えるためというものがあったのですが、英語に翻訳された関西大学の卒業証明証と成績証明証を提出すると、必要最低限のドイツ語力は大学側に認められ、無試験で入学許可がおりました。少し拍子抜けする展開でしたが、有り難くその幸運を頂き、大学が始ま

るまでの期間、語学学校に通うなどして過ごしました。

冬学期から一年間経営学を専攻しましたが、ある拍子に「地球エコロジー学」という分野を見つけ、以前より高い関心があるものだったので思い切って学科変更を行いました。「地球エコロジー学」とは「環境問題指向の自然科学」を意味します。環境というものが一体どのように機能し、作用するのかをまずは理解し、その上で人間が環境の利用の際に生じる諸々の問題を認識し、且つ解決することを、その重要なねらいのひとつとしてかぞえます。「環境」というものを全体が緻密な網で巡らされた一つの系統として捉え、それによって生物圏（生物の共同体）・地圏（地殻、土壌）・水圏（海、川など）・大気圏からなる、いわゆる「(地球)生態系」の中で行われる相互作用の分析を可能に導きます。その学問的基盤を応用し、環境保護や環境の持続可能な利用方法、並びに地球生態系の人為的利用に関連して生じる問題の解決に役立てるのが、総合的な意義のようです。

現在私たちが取り組んでいるのは地理学、地質学、生物学、気候学、その他自然科学要素を多分に含む基礎課程です。これまで文系に首までどっぷりと浸かっていたものにとって、数学や物理、化学といったいわゆる理系というものは逃げ出したくなるほどの嫌悪感を抱かせるものでしたが、私たち人類やその他諸々の生命体を45億年以上に渡り育ててきた母なる地球が、たった一人の子供の不始末に因り、深刻な病に冒されているのを横目に押しやりつつ自分の好き嫌いなどを述べる余裕はなく、一刻も早くその負担を軽減させる方向を取ることが理に適っているのではないかと、私なりに考えます。

テュービンゲン大学の地球エコロジー学科は、2000年に地学部の一学科として新しく設けられた比較的若い学科です。この町の学生にさえもあまり存在が知られていないという状態で、そのせいかな学生数も少なく、例えば2002年冬学期生は20人未満です。おかげで互いに顔をよく覚えられて友達になり易いというのは、外国人に限らず有利な条件だと思えます。毎年12月の第一金曜日は、古くは鉾山の守り神であったという女神「バーバラ」を祀る学部内パーティがあり、また同月中旬には初学期生のために近くのシュベールヴィッシュ・アルプという丘陵地帯にて2泊3日の宿泊旅行が催されます。皆は学科内唯一の日本人に好奇心を隠し

きれず、誰かが何か日本について問いかけると、それを機会に次から次へと質問が押し寄せます。その際に、よく改めて自分の故郷に対する知識の薄弱さを認識させられて情けなくなる一方、そのおかげで自分の知識の穴を知ることが出来たという感謝の念が湧き起こるといふ、複雑な気分になります。自分の国のことについてある程度正しく知っておくことは、「海外で生活する日本人である」という自覚と共に必要なものであることを常々実感させられます。このような環境は、ひとびとの気質や習慣などにそれほどの差異が生じない土地では有り得難く、例えば自分のような島国の住民がソトを見聞する場合などには適した環境であると私は感じています。

ドイツについてすでに持っている知識や、または新しく大学で学んだ知識の諸々が果たして正しいものであるのか知りたいという探求心旺盛な方は、一度実際にドイツを訪ね、可能であれば是非とも現地の人々と共に生活を営み、自分の五感を十分に解放してそれらを確かめてみるのも、よい選択であるかと思われます。

(2000年度 本学ドイツ語ドイツ文学科卒業)